

英語専攻大学生を対象とした英語の学習成果と行動及び態度に関する研究 —性別・英語学習開始時期・英語熟達度・留学経験に基づく比較分析—

大 城 直 人

要 旨

本研究では、英語を専攻する大学生 175 名を対象に、40 項目から成る質問項目を「英語学習で得られた成果」、「英語学習の計画・目標・行動」、「英語学習に対する肯定的態度」、「英語学習における国際的志向性」、「英語学習に対する消極的態度」、「英語学習における動機づけ」の 6 つのカテゴリーに分類し、英語の学習成果、学習行動、学習態度について、性差、英語学習開始時期の遅速、英語熟達度の高低、留学経験の有無を指標として 2 変数間の平均の差を分析した。その結果、学習言語の文化に対する興味・関心・理解の高まりが、性差や英語熟達度の違いによって異なること、また英語学習開始時期や英語熟達度の違いによって、英語学習に対する肯定的態度や消極的態度といった情意的側面に違いが見られることが分かった。さらに、英語熟達度の違いによって、思考態度の質的特性や使用する学習方略が異なることや、留学経験の有無によって動機づけに違いが見られることも明らかになった。

キーワード：英語学習成果、学習行動、学習態度、性別、学習開始時期、熟達度、留学経験

1. 研究の背景と目的

小学校における教科としての英語の導入、高等学校における英語による英語の授業、大学入試における英語入試改革の提案と、グローバル化の進展に伴い、英語教育を取り巻く環境が大きく変化してきている。

とりわけ早期英語教育に関しては、関心が高く期待も大きく膨らんでいるように思われるが、一方では、賛成論者と反対論者との間でその是非について激しく議論が交わされている。言語習得臨界期説を根拠に、発音やリスニング能力の面で早期英語教育の有効性を主張する賛成論者に対し、反対論者は、母語である日本語の習得に与える影響を懸念し、早期英語教育に異議を唱えている。このように、技能面に関しては両者が対立する考えを主張しているが、情意面に関する議論はあまり聞こえてこない。

英語教育熱の高まりとは対照的に、日本人の海外留学者数は 2004 年の 82,945 人をピークに減少の一途をたどり（小島ら, 2014）、若者の内向き志向が強まっていることが度々指摘されているが、若者の留学に対する意識や価値観に変化が生じているのだろうか。今の若者は、留学に何を求め、そこから何を得たいと考えているのだろうか。

社会の変化や時代の要請に応えることも教育に求められる大切な使命の一つであるが、そのためには、正しく現状を認識することが何よりも不可欠である。そしてそれを踏まえ、現状の

改善に資する知見やアイデアを提案することが求められる。

そこで、本研究では、英語の学習成果や学習行動及び学習態度について、英語学習開始時期の違いや留学経験の有無によって差異が見られるのか比較・検討を行う。また、英語学習開始時期や留学経験に加え、性別や英語熟達度の違いにおいても同じように比較・検討する。性別や英語熟達度は、これまで数多くの第二言語習得研究において比較分析の指標として用いられ、多くの知見が先行研究から得られているからである。そのため、本研究で示される結果との比較・考察もより充実したものになることが期待される。

さて、日常生活の中で英語が用いられていない日本のような EFL 環境にあっては、英語を学ぶ目的や意義を見出すことは容易ではない。事実、中高生の多くが、「何のために英語を学ぶのか？」という疑問を抱えながら英語と向き合っている現状がある（江利川ら, 2014）。本研究で英語の学習成果を分析項目の一つに位置付けたのは、英語を学ぶことで得られるもの、すなわち英語の学習成果についての知見を提示することで、英語を学ぶ目的の一端を明らかにすることができると思ったからである。また、学習行動と学習態度については、学習行動が学習成果の直接的な要因であり、且つ学習態度に起因するという関係性が相互に見出されることから、分析項目に加えることにした。

本研究の目的は、英語学習における最終ゴールとも言える「学習成果」、そこに至るプロセスである「学習行動」、そして、それを規定する「学習態度」について、「性別」、「英語学習開始時期」、「英語熟達度」及び「留学経験」の4つの指標に基づく比較・分析を行い、英語教育に資する新たな知見を見出すことである。

2. 方法

2.1 調査協力者と調査手続き

本研究の調査協力者は、沖縄キリスト教学院大学人文学部英語コミュニケーション学科に在籍する1年生から4年生までの175名であった。性別の内訳は男性42名、女性133名で、平均年齢は19.7歳($SD: 1.93$; 18歳～30歳)であった。

2015年7月に英語講読の授業担当者の協力を得て、授業時間の一部を利用し、質問紙調査を実施した。所要時間は10分程度であった。

2.2 調査内容

質問紙(付録参照)は、性別・年齢、英語学習開始時期や英語熟達度など、調査協力者の属性に関する質問項目11項目と、英語学習の目的や信念、学習行動などに関する質問項目40項目の2部門から構成された。質問紙は無記名とし、一般論としてではなく、調査協力者自身の考えに基づいて回答するよう明記した。回答は、「1. 全く当てはまらない」、「2. 当てはまらない」、「3. あまり当てはまらない」、「4. やや当てはまる」、「5. 当てはまる」、「6. 非常に当てはまる」の6件法で回答を求めた。偶数個のリカート尺度を用いたのは、調査協力者が適当に中立的な選択肢(「どちらでもない」)を選ぶのを回避し、より正確な回答を得るためであった。

本稿では、質問項目を以下の6つのカテゴリーに分類し、「性別」、「英語学習開始時期」、「英語熟達度」及び「留学経験の有無」の違いから分析を試みた。

- (1) 英語学習で得られた成果(7項目)
- (2) 英語学習の計画・目標・行動(7項目)
- (3) 英語学習に対する肯定的態度(5項目)
- (4) 英語学習における国際的志向性(7項目)
- (5) 英語学習に対する消極的態度(6項目)
- (6) 英語学習における動機づけ(4項目)

英語学習開始時期については、中学校入学以前に英語の学習を始めた「早期学習開始群」($n = 101$)と、中学校入学後に英語の学習を始めた「非早期学習開始群」($n = 74$)に分類した。

また、英語熟達度については、「1. 中上級レベル(英検準1級以上/TOEIC 730点以上)」、「2. 中級レベル(英検2級程度/TOEIC 530～720点程度)」、「3. 初中級レベル(英検準2級程度/TOEIC 450～520点程度)」、「4. 初級レベル(英検3級程度/TOEIC 270～440点程度)」、「5. 基礎レベル(英検4級以下/TOEIC 260点以下)」の5段階の尺度から、調査協力者の自己申告に基づき、中級レベル以上を「英語熟達度上位群」($n = 51$)、初級レベル以下を「英語熟達度下位群」($n = 73$)に分類した。

留学経験の有無については、留学未経験者を「留学未経験群」($n = 78$)、6カ月以上の留学経験を「留学経験群」($n = 18$)とした。

3. 結果

3.1 独立変数間の連関性

独立変数(「性別」、「英語学習開始時期」、「英語熟達度」、「留学経験」)間の連関性を調べるために、 χ^2 検定を行った。その結果、表1、表2に示すとおり、「性別」と「英語学習開始時期」($\chi^2 = 2.308$, $df = 1$, $p = .129$)、「性別」と「留学経験」($\chi^2 = .236$, $df = 1$, $p = .627$)の間には有意差は認められなかったが、表3に示すとおり、「性別」と「英語熟達度」の連関性は1%水準で有意であった($\chi^2 = 8.093$, $df = 1$, $p = .004$)。また、表4、表5より、「英語学習開始時期」と「英語熟達度」($\chi^2 = 1.769$, $df = 1$, $p = .183$)、「英語学習開始時期」と「留学経験」($\chi^2 = .434$, $df = 1$, $p = .510$)の間には有意差は認められなかったが、表6に示すとおり、「英語熟達度」と「留学経験」の連関性は0.1%水準で有意であった($\chi^2 = 31.835$, $df = 1$, $p = .000$)。

3.2 カテゴリー別の調査結果

英語学習に関する6つのカテゴリーにおける項目の平均値は、「英語学習で得られた成果」が4.36($SD = 0.92$)、「英語学習の計画・目標・行動」が4.15($SD = 0.92$)、「英語学習に対する肯定的態度」が4.82($SD = 0.78$)、「英語学習における国際的志向性」が5.36($SD =$

表 1. 性別と学習開始時期のクロス表

			学習開始時期		合計
			早期	非早期	
性別	男性	度数	20	22	42
		性別の%	47.6%	52.4%	100.0%
	女性	度数	81	52	133
		性別の%	60.9%	39.1%	100.0%
合計		度数	101	74	175
		性別の%	57.7%	42.3%	100.0%

表 2. 性別と留学経験のクロス表

			学習開始時期		合計
			早期	非早期	
性別	男性	度数	22	4	26
		性別の%	84.6%	15.4%	100.0%
	女性	度数	57	14	71
		性別の%	80.3%	19.7%	100.0%
合計		度数	79	18	97
		性別の%	81.4%	18.6%	100.0%

表 3. 性別と英語熟達度のクロス表

			英語熟達度		合計
			下位群	上位群	
性別	男性	度数	25	6	31
		性別の%	80.6%	19.4%	100.0%
	女性	度数	48	45	93
		性別の%	51.6%	48.4%	100.0%
合計		度数	73	51	124
		性別の%	58.9%	41.1%	100.0%

表 4. 英語学習開始時期と英語熟達度のクロス表

			英語熟達度		合計
			下位群	上位群	
開始時期	早期	度数	37	32	69
		開始時期の%	53.6%	46.4%	100.0%
	非早期	度数	36	19	55
		開始時期の%	65.5%	34.5%	100.0%
合計		度数	73	51	124
		開始時期の%	58.9%	41.1%	100.0%

表 5. 英語学習開始時期と留学経験のクロス表

			留学経験		合計
			なし	あり	
開始時期	早期	度数	46	12	58
		開始時期の%	79.3%	20.7%	100.0%
	非早期	度数	33	6	39
		開始時期の%	84.6%	15.4%	100.0%
合計		度数	79	18	97
		開始時期の%	81.4%	18.6%	100.0%

表 6. 英語熟達度と留学経験のクロス表

			留学経験		合計
			なし	あり	
熟達度	下位群	度数	41	0	41
		開始時期の%	100.0%	0.0%	100.0%
	上位群	度数	10	15	25
		開始時期の%	40.0%	60.0%	100.0%
合計		度数	51	15	66
		開始時期の%	77.3%	22.7%	100.0%

0.68), 「英語学習に対する消極的態度」が 3.16 ($SD = 0.75$), 「英語学習における動機づけ」が 5.52 ($SD = 0.54$) となった。内的整合性を検討するために各カテゴリーにおけるクロンバックの α 係数を算出したところ, 「英語学習で得られた成果」で $\alpha = .86$, 「英語学習の計画・目標・行動」で $\alpha = .83$, 「英語学習に対する肯定的態度」で $\alpha = .78$, 「英語学習における国際的志向性」で $\alpha = .85$, 「英語学習に対する消極的態度」で $\alpha = .66$, 「英語学習における動機づけ」で $\alpha = .59$ の値が得られた。6つのカテゴリーにおける質問項目ごとの記述統計は表7のとおりである。

次に, 各カテゴリー間の相関係数を表8に示す。6つのカテゴリーのうち, 「英語学習に対する消極的態度」を除く5つのカテゴリーは, 互いに有意な中程度の正の相関を示した。一方, 「英語学習に対する消極的態度」は, 「英語学習で得られた成果」, 「英語学習の計画・目標・行動」, 「英語学習における国際的志向性」の3つのカテゴリーと有意な弱い負の相関を, 「英語学習に対する肯定的態度」との間に有意な中程度の負の相関を示した。

3.3 「性別」の違いによる差異の検討

性別の違いによる差異を検討するために, 英語学習に関する6つのカテゴリーについて t 検定を行った。その結果を表9に示す。

「英語学習で得られた成果」($t = -1.347$, $df = 172$, $p = .180$, $d = 0.24$), 「英語学習の計画・目標・行動」($t = 0.979$, $df = 170$, $p = .329$, $d = 0.17$), 「英語学習における肯定的態度」($t = 0.270$, $df = 173$, $p = .787$, $d = 0.05$), 「英語学習における国際的志向性」($t = -0.020$, $df = 170$, $p = .984$, $d = 0.00$), 「英語学習に対する消極的態度」($t = 0.228$, $df = 168$, $p = .820$, $d = 0.04$), 「英語学習における動機づけ」($t =$

表 7. 6つのカテゴリーにおける質問項目ごとの記述統計量 ($n = 175$)

	項目	Mean	SD
英語学習で得られた成果 (6項目, $\alpha = .86$)			
17	英語を通して、西洋の文化に対する興味・関心が高まった	5.074	1.056
27	英語を学ぶことで、日本の文化に対する興味・関心が高まった	4.577	1.256
23	英語を学ぶことで、積極的に人とコミュニケーションをとるようになった	4.466	1.215
13	英語を通して、西洋のものの見方や考え方を理解することができた	4.046	1.254
10	英語を学ぶことで、日本語の理解が深まった	4.040	1.266
14	英語を学ぶことで、前向きに物事を考えるようになった	3.960	1.349
英語学習の計画・目標・行動 (7項目, $\alpha = .83$)			
35	あの人のように英語を話せるようになりたい、という目標となる人がある	4.954	1.334
39	英語を一生懸命勉強している	4.314	1.281
28	英語で、ネイティブの先生と積極的にコミュニケーションをとるように心掛けている	4.234	1.212
05	英検などの資格試験に向けて、英語の勉強に取り組んでいる	4.017	1.349
38	英文法の学習に力を入れて取り組んでいる	3.983	1.275
34	英単語の学習に熱心に取り組んでいる	3.908	1.291
36	計画を立てて、英語の学習に取り組んでいる	3.598	1.414
英語学習に対する肯定的態度 (5項目, $\alpha = .78$)			
01	英語はとても好きだ	5.223	0.892
33	英語の勉強を続ければ、必ず英語はできるようになると思う	5.223	1.105
19	英語の授業は楽しい	5.086	1.077
15	英語を勉強するのは楽しい	4.960	1.090
09	英語はとても得意だ	3.629	1.181
英語学習における国際的志向性 (7項目, $\alpha = .85$)			
18	将来、海外旅行に行きたいと考えている	5.766	0.622
07	英語を勉強して、もっと自分の視野を広げたい	5.686	0.702
32	英語を使って、外国の人とコミュニケーションをとりたい	5.500	0.872
06	洋楽を聴いたり、洋画を観たりするのが好きだ	5.463	0.987
04	将来、留学したいと考えている	5.289	1.077
08	外国の人と友達になりたいので、英語を学んでいる	4.966	1.250
31	英語を通して、日本の文化や価値観を、外国の人に伝えたい	4.828	1.214
英語学習に対する消極的態度 (6項目, $\alpha = .66$)			
21	英語は難しい	4.989	1.114
37	どのように英語を勉強したらよいか、よく分からない	4.246	1.327
29	英語の授業はあまり理解できない	2.751	1.211
30	英語ができなくても、将来、特に困ることはない	2.746	1.278
24	英語を勉強するのはあまり好きではない	2.329	1.258
11	何のために英語を勉強するのか分からない	1.926	1.184
英語学習における動機づけ (4項目, $\alpha = .59$)			
26	英語ができると、将来役に立つと思う	5.754	0.549
02	英語が話せたら格好いいと思う	5.737	0.719
16	英語を勉強する必要性を強く感じている	5.460	0.802
03	将来就きたい職業は、英語力が要求される	5.120	1.121

表 8. 6 つのカテゴリー間の相関係数

	1	2	3	4	5	6	Mean	SD
1. 英語学習で得られた成果	—	.444**	.564**	.563**	-.331**	.482**	4.36	0.92
2. 英語学習の計画・目標・行動		—	.605**	.467**	-.340**	.437**	4.15	0.92
3. 英語学習に対する肯定的態度			—	.649**	-.618**	.546**	4.82	0.78
4. 英語学習における国際的志向性				—	-.348**	.651**	5.36	0.68
5. 英語学習に対する消極的態度					—	-.349**	3.16	0.75
6. 英語学習における動機づけ						—	5.52	0.54

** $p < .001$

-0.011, $df = 172$, $p = .991$, $d = 0.00$) の全てのカテゴリーにおいて、性別による得点の有意差は見られなかった。また、効果量 (Cohen's d) を算出した結果、「英語学習で得られた成果」では小さな効果量が得られたが、その他のカテゴリーでは効果量は確認されなかった。そこで、質問項目ごとに t 検定を行った結果、「英語学習で得られた成果」の下位項目である「13 英語を通して、西洋のものの見方や考え方を理解することができた」($t = -2.274$, $df = 173$, $p = .024$, $d = 0.40$) において、5%水準で性別の違いによる有意差が確認できた。

3.4 「英語学習開始時期」の違いによる差異の検討

英語学習開始時期の違いによる差異を検討するために、英語学習に関する6つのカテゴリーについて t 検定を行った。その結果を表10に示す。

「英語学習で得られた成果」($t = 1.513$, $df = 172$, $p = .132$, $d = 0.23$), 「英語学習の計画・目標・行動」($t = 1.190$, $df = 170$, $p = .236$, $d = 0.19$), 「英語学習における国際的志向性」($t = 0.248$, $df = 170$, $p = .804$, $d = 0.04$), 「英語学習における動機づけ」($t = 0.316$, $df = 172$, $p = .753$, $d = 0.05$) の4つのカテゴリーにおいて、英語学習開始時期の違いによる得点の有意差は見られなかった。一方、「英語学習における肯定的態度」($t = 2.925$, $df = 173$, $p = .004$, $d = 0.45$) では1%水準で、「英語学習に対する消極的態度」($t = -2.345$, $df = 168$, $p = .020$, $d = 0.36$) では5%水準で、「早期学習開始群」と「非早期学習開始群」との間に有意差が確認された。また、効果量 (Cohen's d) を算出した結果、「英語学習における肯定的態度」で中程度の効果量が、「英語学習に対する消極的態度」と「英語学習で得られた成果」で小さな

効果量が得られた。一方、その他のカテゴリーにおいては、効果量は確認されなかった。

さらに、質問項目ごとに t 検定を行ったところ、「英語学習における肯定的態度」の下位項目である「19 英語の授業は楽しい」($t = 2.652$, $df = 173$, $p = .009$, $d = 0.41$) と「9 英語はとても得意だ」($t = 3.262$, $df = 173$, $p = .001$, $d = 0.50$) が1%水準で、「英語学習に対する消極的態度」の下位項目である「29 英語の授業はあまり理解できない」($t = -2.575$, $df = 171$, $p = .011$, $d = 1.47$) が5%水準で、英語学習開始時期の違いによる有意な差が確認された。

3.5 「英語熟達度」の違いによる差異の検討

英語熟達度の違いによる差異を検討するために、英語学習に関する6つのカテゴリーについて t 検定を行った。その結果を表11に示す。

「英語学習で得られた成果」($t = -3.953$, $df = 121$, $p = .000$, $d = 0.72$), 「英語学習における肯定的態度」($t = -4.799$, $df = 122$, $p = .000$, $d = 0.88$), 「英語学習に対する消極的態度」($t = 4.592$, $df = 117$, $p = .000$, $d = 0.85$) において、0.1%水準で「英語熟達度下位群」と「英語熟達度上位群」の間に有意差が確認され、算出された効果量 (Cohen's d) も大きな値を示した。また、「英語学習の計画・目標・行動」($t = -2.818$, $df = 119$, $p = .006$, $d = 0.52$) では、1%水準で「英語熟達度下位群」と「英語熟達度上位群」の間に有意差が確認され、算出された効果量 (Cohen's d) の値は中程度であった。一方、「英語学習における国際的志向性」($t = -1.492$, $df = 120$, $p = .138$, $d = 0.27$), 「英語学習における動機づけ」($t = -1.130$, $df = 121$, $p = .261$, $d = 0.21$) においては、英語熟達度の違いによる有意差は見られなかった。

表 9. 性別の平均値と標準偏差及び t 検定の結果

	男性		女性		t 値
	M	SD	M	SD	
英語学習で得られた成果	4.190	1.095	4.409	0.852	-1.347
英語学習の計画・目標・行動	4.269	0.903	4.109	0.926	0.979
英語学習に対する肯定的態度	4.852	0.769	4.815	0.785	0.270
英語学習における国際的志向性	5.354	0.766	5.356	0.658	-0.020
英語学習に対する消極的態度	3.188	0.745	3.156	0.758	0.228
英語学習における動機づけ	5.518	0.578	5.519	0.530	-0.011

表 10. 英語学習開始時期別の平均値と標準偏差及び t 検定の結果

	非早期学習開始群		早期学習開始群		t 値
	M	SD	M	SD	
英語学習で得られた成果	4.233	0.949	4.446	0.889	1.513
英語学習の計画・目標・行動	4.048	0.969	4.218	0.883	1.190
英語学習に対する肯定的態度	4.627	0.858	4.968	0.684	2.925**
英語学習における国際的志向性	5.340	0.642	5.366	0.712	0.248
英語学習に対する消極的態度	3.322	0.787	3.051	0.710	-2.345*
英語学習における動機づけ	5.503	0.489	5.530	0.577	0.316

* $p < .05$, ** $p < .01$

表 11. 英語熟達度別の平均値と標準偏差及び t 検定の結果

	英語熟達度下位群		英語熟達度上位群		t 値
	M	SD	M	SD	
英語学習で得られた成果	4.060	0.994	4.732	0.827	-3.953**
英語学習の計画・目標・行動	3.915	0.958	4.426	1.012	-2.818*
英語学習に対する肯定的態度	4.529	0.832	5.184	0.609	-4.799**
英語学習における国際的志向性	5.276	0.695	5.448	0.527	-1.492
英語学習に対する消極的態度	3.495	0.726	2.866	0.757	4.592**
英語学習における動機づけ	5.455	0.565	5.564	0.466	-1.130

** $p < .01$, *** $p < .001$

表 12. 留学経験の有無の平均値と標準偏差及び t 検定の結果

	留学未経験者		留学経験者		t 値
	M	SD	M	SD	
英語学習で得られた成果	4.293	0.900	4.481	0.948	-0.793
英語学習の計画・目標・行動	4.203	0.902	3.825	0.928	1.588
英語学習に対する肯定的態度	4.790	0.773	4.789	0.584	0.005
英語学習における国際的志向性	5.376	0.753	5.167	0.488	1.126
英語学習に対する消極的態度	3.275	0.776	3.111	0.769	0.807
英語学習における動機づけ	5.567	0.576	5.250	0.500	2.154*

* $p < .05$

が、小さな効果量を示した。

質問項目ごとに t 検定を行ったところ、「英語学習で得られた成果」の下位項目である「17 英語を通して西洋の文化に対する興味・関心が高まった」($t = -3.414$, $df = 122$, $p = .001$, $d = 0.62$), 「13 英語を通して西洋のものの見方や考え方を理解することができた」($t = -3.468$, $df = 122$, $p = .001$, $d = 0.63$), 「14 英語を学ぶことで前向きに物事を考えるようになった」($t = -3.173$, $df = 122$, $p = .002$, $d = 0.58$) の3項目が1%水準で、英語熟達度の違いによる有意差が確認された。また、「英語学習における肯定的態度」の下位項目である「1 英語はとても好きだ」($t = -4.409$, $df = 122$, $p = .000$, $d = 0.80$), 「15 英語を勉強するのは楽しい」($t = -3.719$, $df = 122$, $p = .000$, $d = 0.68$), 「9 英語はとても得意だ」($t = -6.787$, $df = 122$, $p = .000$, $d = 1.24$) の3項目において、0.1%水準で、英語熟達度の違いによる有意差が見られた。

さらに、「英語学習に対する消極的態度」の下位項目である「37 どのように英語を勉強したらよいか分からない」($t = 3.872$, $df = 122$, $p = .000$, $d = 0.71$), 「29 英語の授業はあまり理解できない」($t = 4.889$, $df = 120$, $p = .000$, $d = 0.90$), 「24 英語を勉強するのはあまり好きではない」($t = 3.766$, $df = 120$, $p = .000$, $d = 0.69$) の3項目が0.1%水準で、「21 英語は難しい」($t = 3.201$, $df = 122$, $p = .002$, $d = 0.58$) が1%水準で、英語熟達度の違いによる有意な差が確認された。また、「英語学習の計画・目標・行動」の下位項目である「5 英検などの資格試験に向けて英語の勉強に取り組んでいる」($t = -5.096$, $df = 121$, $p = .000$, $d = 0.93$) においても、0.1%水準で、英語熟達度の違いによる有意差が確認された。

3.6 「留学経験の有無」の違いによる差異の検討

留学経験の有無の違いによる差異を検討するために、英語学習に関する6つのカテゴリについて t 検定を行った。その結果を表12に示す。

「英語学習で得られた成果」($t = -0.793$, $df = 95$, $p = .430$, $d = 0.21$), 「英語学習の計画・目標・行動」($t = 1.588$, $df = 92$, $p = .116$, $d = 0.42$), 「英語学習における肯定的態度」($t = 0.005$, $df = 95$, $p = .996$, $d = 0.00$), 「英

語学習における国際的志向性」($t = 1.126$, $df = 95$, $p = .263$, $d = 0.29$), 「英語学習に対する消極的態度」($t = 0.807$, $df = 93$, $p = .422$, $d = 0.21$) の5つのカテゴリにおいては、留学経験の有無による有意差は確認されなかった。しかしながら、効果量 (Cohen's d) を算出してみると、「英語学習の計画・目標・行動」で中程度の効果量を示した。一方、「英語学習における動機づけ」($t = 2.154$, $df = 94$, $p = .034$, $d = 0.56$) では、5%水準で、「留学未経験者」と「留学経験者」との間に有意差が確認され、算出された効果量 (Cohen's d) は中程度であった。

そこで、質問項目ごとに t 検定を行ったところ、「英語学習の計画・目標・行動」の下位項目である「39 英語を一生懸命勉強している」($t = 2.705$, $df = 95$, $p = .008$, $d = 0.71$) が1%水準で、「38 英文法の学習に力を入れて取り組んでいる」($t = 2.009$, $df = 95$, $p = .047$, $d = 0.52$), 「34 英単語の学習に力を入れて取り組んでいる」($t = 2.206$, $df = 94$, $p = .030$, $d = 0.58$) の2項目が5%水準で、留学経験の有無による違いによって有意差が確認された。また、「英語学習における動機づけ」の下位項目である「26 英語ができると将来役に立つと思う」($t = 2.052$, $df = 95$, $p = .043$, $d = 0.54$) においては、5%水準で、留学経験の有無の違いによる有意な差が確認された。

4. 考察

4.1 性別との関係

英語学習における性差に関する研究は数多く行われている。中高生を対象に学習方略使用の男女差を調べた研究(平野ら, 2001; 前田, 2003)では、同程度の英語力を有する場合でも、女性の方が男性より多様な学習方略を積極的に使用していることが確認されている。また、学習動機に関する研究では、高学年児童を対象とした研究(林原, 2013)において、英語学習動機の4因子のうち、「有用性」、「内発的」、「不安回避」の3因子で、女子の方が男子よりも有意に高かったことが報告されている。さらに、異文化受容と性差との関係についての研究(Kobayashi, 2002; 枝澤, 2005)においても、女子学生の優位性が示されている。これらの研究は、学習者の情意的側面を対象としたもので

あるが、技能的側面における性差を扱った研究 (Boyle, 1987 ; Scarcella & Zimmerman, 1998) においては、リスニングテストやアカデミック語彙力テストにおける男子学生の優位性も指摘されている。

本研究では、英語学習に対する意識や学習行動の実態について、「英語学習で得られた成果」、「英語学習の計画・目標・行動」、「英語学習に対する肯定的態度」、「英語学習における国際的志向性」、「英語学習に対する消極的態度」、「英語学習における動機づけ」の6つのカテゴリーに分類して、性別の違いによる差異を検討したが、全てのカテゴリーにおいて性差による有意差は確認されなかった。しかし、質問項目ごとに調べてみると、「英語学習で得られた成果」の下位項目「13 英語を通して、西洋のものの見方や考え方を理解することができた」において、男性よりも女性が5%水準で有意に高い得点を示した。ものの見方や考え方は見えない文化(八代ら, 2010)であり、西洋のものの見方や考え方を理解するということは、異文化理解すなわち異文化を受容するという事に相違ない。この結果は、女性の方が異文化の受容度が高いという先行研究の結果とも符合する。目標言語の文化に興味・関心を持つことは、外国語学習成功者に共通して見られる学習ストラテジーの一つである(竹内, 2003)が、日々の英語教育の実践においても、その重要性を認識し、異文化理解を促すための工夫を凝らす必要がある。

4.2 英語学習開始時期との関係

小学校における英語教科化の動きに伴い、早期英語学習に対する関心が高まっている。しかし、早期英語学習の効果に関しては、これまで様々な調査研究が行われてきたが、肯定的評価と否定的評価に二分され、一致した評価は得られていない。

中高生を対象に技能面における早期英語学習経験の影響を調査した研究(樋口ら, 2007 ; 静, 2007)では、リスニング能力やスピーキング能力における小学校英語学習経験者の優位性が示されている。また、中学校入学以前に英語教育を受けたことのある成人は、そうでない成人と比べ、英会話力や読解力が有意に高かったことを示す研究(カレイラ松崎, 2011)もある。その一方で、早期英語学習経験の有無による技能

面の違いは見られないと結論づける研究(白畑, 2002)もある。

また、情意面においては、中学生の場合は早期英語学習経験の有無が動機づけや英語学習に対する肯定的態度に違いをもたらすが、高校生や大学生ではそのような違いが見られないことを示す研究(Takagi, 2003a)や、中学校入学以前の英語学習経験の有無が、中学校入学初年度の英語学習意欲に影響を与えないとする研究(山森, 2004)もある。

本研究では、「英語学習開始時期」と「英語熟達度」の連関性に有意な差は確認されず、技能面における早期英語学習の効果を支持する結果は得られなかった。上述したとおり、中学校入学以前の英語学習経験が、成人英語学習者の英会話力や読解力に影響を及ぼすという早期英語学習経験の技能面におけるプラスの効果を示す先行研究の知見もないわけではないが、本研究の結果と照らし合わせて考えると、早期英語学習経験の技能面への影響は、英語力全体の一部に影響を与える部分的なものであり、且つ、必ずしも長期的に効力が持続するようなものではないと解釈することができるのではないだろうか。

一方、「英語学習における肯定的態度」や「英語学習に対する消極的態度」といった情意面に関するカテゴリーに関しては、英語学習開始時期の違いによる差異が確認されたが、その違いは英語力の自己評価や英語の授業に対する肯定的態度において顕著であった。「外国語を用いてコミュニケーションを図る楽しさを体験する」ことが小学校学習指導要領外国語活動の指導内容に明記されているが、本研究の結果は、小学校における外国語活動がその目的を十分果たし、その成果も長期的に持続するものであることを示唆するものとなった。また、日本のようなEFL環境においては、英語の授業は英語に触れる数少ない機会であり、英語学習の大部分を担っている。従って、授業に対する肯定的態度は英語習得の成否を左右する重要な要素であると言っても過言ではない。長谷川(2013)は、英語接触量や授業時間数が英語学習に対する関心・意欲・態度に影響を及ぼすことを指摘しているが、本研究の結果からも、長期的な展望に立って、小学校における英語学習の質と量の充実に努めることが重要であると言えるだろう。

4.3 英語熟達度との関係

英語熟達度の違いによる差異は、「英語学習で得られた成果」、「英語学習における肯定的態度」、「英語学習に対する消極的態度」の3つのカテゴリーにおいて顕著であった。先述したとおり、竹内（2003）は、外国語習得に成功する上で異文化理解・異文化受容が大事な役割を果たしていることを指摘しているが、「英語学習で得られた成果」の2つの下位項目「17 英語を通して西洋の文化に対する興味・関心が高まった」、「13 英語を通して西洋のものの見方や考え方を理解することができた」において1%水準で英語熟達度の違いによる有意な差が見られたことは、竹内の指摘にも合致し、外国語習得における異文化理解の重要性が、本研究においても追認されたとと言えるだろう。また、英語熟達度の上位群において、1%水準の有意な差で「14 英語を学ぶことで前向きに物事を考えるようになった」という思考過程における肯定的変化が確認されたことは、非常に興味深い結果と言えるだろう。英語を学ぶことで多様なものの見方や考え方に触れ視野が広がり、多面的・複眼的に物事を捉える習慣が確立され、それが前向きな思考態度の醸成へと繋がっていると推測される。外国語学習と肯定的心的態度の獲得との関連性に関する研究はこれまであまり行われていないようだが、実証的な研究に値するテーマに成り得るのではないだろうか。

次に、「英語学習に対する消極的態度」の下位項目である「37 どのように英語を勉強したらよいか分からない」という項目で英語熟達度の違いによる差異が顕著であった点に言及したい。英語が苦手な学習者に共通して見られる課題は、「勉強の仕方が分からない」ということである。勉強の仕方が分からないために授業も理解できず、英語が好きになれないという負のスパイラルが形成されてしまう。英語学習に対する消極的態度の元凶とも言える学習方法の無知を解消することが不可欠である。学習方法を知ることによって自律性が養われ、自律性の獲得が自己効力感や学習意欲を高め、さらに学習意欲の上昇が英語力の向上をもたらす。このような正の連鎖を生み出すためにも、熟達度の低い学習者に対しては、学習方法の指導を含む学習支援体制の構築が求められる。

さらに、英語熟達度の違いによる差異は、「英

語学習の計画・目標・行動」の下位項目である「5 英検などの資格試験に向けて英語の勉強に取り組んでいる」においても、0.1%水準で有意であった。熟達度の高い外国語学習者は、熟達度の低い学習者に比べ、目標を設定し計画を立て実行するというメタ認知方略を多用することが確認されているが（茂木ら、2003；大岩 2006）、本研究においてもそれを裏付ける結果が示された。英語教育の場面では、直接方略（記憶方略・認知方略・補償方略）に関する指導は積極的に行われているが、間接方略（メタ認知方略・情意的方略・社会的方略）に関する指導については十分行われているとは言い難い。外国語学習者の習熟度を最も予測する要因（大岩、2008）であるメタ認知方略の指導の必要性を認識し、計画的に取り組みを進める必要がある。

4.4 留学経験との関係

語学力の向上のみならず、自国の文化や価値観を客観視する相対的なものの見方や柔軟な姿勢の獲得、さらには人的ネットワークの構築など、留学経験を通して得られる成果は計り知れず、留学の意義は極めて大きい。そこで、本研究においても、留学経験の有無によってどのような違いが見られるのか検討した。その結果、「英語学習で得られた成果」、「英語学習の計画・目標・行動」、「英語学習に対する肯定的態度」、「英語学習における国際的志向性」、「英語学習に対する消極的態度」、「英語学習における動機づけ」の6つのカテゴリーのうち、「英語学習における動機づけ」のみ、5%水準で、「留学未経験者」と「留学経験者」との間に有意な差が確認された。本研究における動機づけとは外発的動機づけに位置付けられるものであるが、留学経験者に比べ、留学未経験者の外発的動機づけが有意に高いという結果が得られた。

留学後、自分自身の英語力不足や未熟さを思い知らされたという感想を口にする留学経験者は少なくないが、そのような経験を通して、純粹にもっと英語を学びたいという内的欲求、すなわち、内発的動機づけが強化された結果、相対的に外発的動機づけが低下し留学未経験者との差異が生じたと推測することができる。また、留学前は学ぶ対象でしかなかった英語が、留学を通してコミュニケーションの道具としての新たな価値を帯び、学ぶ対象から使う道具へと質

的に変化したことも、外発的動機づけの程度が留学未経験者に比べ低くなっている要因と考えられる。同時に、留学未経験者の多くが1年生であることを考えると、高校までのテストのために英語を勉強するという外発的に動機づけられた英語学習形態の影響が、依然として色濃く影を落としていると解釈することも可能だろう。

上記のとおり、「英語学習における動機づけ」以外のカテゴリーでは留学経験の有無による差異は見られなかったが、質問項目ごとに分析してみると、「英語学習の計画・目標・行動」の下位項目である「39 英語を一生懸命勉強している」、「38 英文法の学習に力を入れて取り組んでいる」、「34 英単語の学習に力を入れて取り組んでいる」の3項目において、5%水準で留学未経験者が有意に高い得点を示した。石橋ら(2014)は、熟達度の違いによる英語学習内容の実態調査において、英語熟達度の高群では4技能が統合された領域横断的な学習が行われているのに対し、英語熟達度の低群では、文法や語彙の学習といった英語の基礎力を培う学習を好んで行う傾向があることを明らかにしている。本研究では、英語熟達度と留学経験の連関性が有意であることを確認しているが、その結果を勘案すると、留学未経験者が、英文法の学習や単語の学習などの基礎的学習を重視した学習行動をとっていることも十分納得できる。また、留学未経験者の多くが1年生であったことは先に述べたが、本研究の結果から、留学未経験者が高校までの基礎的学習を重視する学習スタイルを継続している実態が浮かび上がってくる。留学経験の有無による違いから示唆されることは、英語の学習行動全般において、「学ぶ」から「使う」への質的転換が英語力向上には不可欠だということである。

5. 結論

本研究では、英語学習に対する意識や学習行動の実態に関する質問項目を、「英語学習で得られた成果」、「英語学習の計画・目標・行動」、「英語学習に対する肯定的態度」、「英語学習における国際的志向性」、「英語学習に対する消極的態度」、「英語学習における動機づけ」の6つのカテゴリーに分類し、性別、英語学習開始時期、英語熟達度、留学経験の4つの独立変数に基づき比較分析を行った。

その結果、学習言語の文化に対する興味・関心・理解の高まりが、性別の違いや英語熟達度の違いによって異なることが分かった。また、英語学習に対する肯定的態度や消極的態度といった情意面における違いが、英語学習開始時期の違いや英語熟達度の違いによって説明できることも分かった。さらに、英語熟達度の違いによって思考態度の質や使用する学習方略が異なること、また留学経験の有無によって動機づけに違いが見られることも明らかになった。

本研究で示した結果の多くは、先行研究の知見と符合するものであったが、早期英語学習経験が情意面に肯定的な影響を与え、且つ長期的にその効力が持続することや、英語熟達度の上昇に伴い思考態度の肯定的変化が生じること、さらに、留学経験が内発的動機づけを高める可能性のあることが示されたことは、英語教育に新たな視点を提供し得るものであると考える。

一方、課題も散見される。本研究の調査協力者は、英語コミュニケーション専攻の大学生であり、他分野を専攻する大学生を対象とした場合には、異なった結果が示される可能性もある。また、発達段階の異なる中高生を調査対象とした場合も同様に、異なった結果が得られることが予想される。従って、本研究で得られた知見を一般化することは適切とは言えないだろう。今後は、調査対象者の幅を広げ、より包括的な知見を得ることができればと考えている。

謝 辞

アンケート調査の回答に協力して頂いた学生の皆さんに心より感謝致します。また、アンケート調査の実施に際し、ご協力下さった英語講読授業を担当する先生方に対しても、この場を借りて厚くお礼申し上げます。

引用文献

- Boyle, J.P. (1987). Sex differences in listening vocabulary. *Language Learning*, 37, 273-284
 カレイラ松崎順子 (2011). JGSS-2010 による早期英語教育に関する意識調査 日本版

- 総合的社会調査協同研究拠点研究論文集, 11, 35-45
- 枝澤康代 (2005). 日本人大学生の外国語習得に見られる異文化受容と性差 同志社女子大学総合文化研究所紀要, 22, 64-74
- 江利川春夫・斉藤兆史・鳥飼久美子・大津由紀雄 (2014). 学校英語教育は何のため? 東京: ひつじ書房
- 長谷川修治 (2013). 小学校英語の開始学年と指導形態の及ぼす効果: 熟達度テストと意識調査による比較検証 小学校英語教育学会学会誌, 13, 163-178
- 林原 慎 (2013). 日本の高学年児童における英語学習動機に影響を及ぼす要因 日本教育工学会論文誌, 37(2), 117-127
- 樋口忠彦・大村吉弘・田邊義隆・國方太司・加賀田哲也・泉恵美子・衣笠知子・箱暗雄子・植松茂男・三上明洋 (2007). 小学校英語学習経験者の追跡調査と小・中学校英語教育への示唆 近畿大学語学教育部紀要, 7(2), 123-180
- 平野絹枝・赤松信彦・姉崎達夫 (2001). 日本人中学生・高校生の英語語彙学習方略ー学習経験年数と性差の影響ー 上越教育大学研究紀要, 20(2), 459-472
- 石橋嘉一・三輪眞木子 (2014). 英語専攻の日本人大学生における授業外英語学習の実態調査ー英語学習内容のカテゴリ分析と言語熟達度との関係ー 日本教育工学会論文誌, 38(1), 39-48
- Kobayashi, Y. (2002). The role of gender in foreign language attitudes: Japanese female students' attitudes towards English learning. *Gender and Education*, 14, 2, 181-197
- 小島奈々恵・内野悌司・磯部典子・高田 純・二本松美里・岡本百合・三宅典恵・神人 蘭・矢式寿子・吉原正治 (2014). 日本人大学生の海外留学に関する意識調査ー「内向き志向」と留学意思の関係ー 総合保健科学, 30, 21-26
- 前田啓朗 (2003). 日本の英語学習者における学習方略と学習成果: 性差を考慮した適性処遇交互作用の観点から 広島外国語教育研究, 6, 81-90
- 茂木良治・常磐僚子 (2003). フランス語教育における学習ストラテジー研究 *Etudes didactiques du FLE au Japon*, 12, 68-87
- 大岩昌子 (2006). ワーキングメモリと学習ストラテジーからみたフランス語学習者の習熟度別グループの特質 名古屋外国語大学外国語学部紀要, 31, 17-26
- 大岩昌子 (2008). 外国語学習者の習熟度を最も予測する要因は何かー重回帰分析を用いてー 日本認知科学会第25回大会発表論文集, P1-7
- Scarcella, R. and Zimmerman, C. (1998). Academic words and gender: ESL student performance on a test of academic lexicon. *Studies in Second Language Acquisition*, 20(1), 27-49
- 白畑知彦 (2002). 研究開発学校で英語に接した児童の英語能力調査 静岡大学教育学部研究報告 (教科教育学篇), 33, 195-215
- 静 哲人 (2007). 小学校段階での英語学習が高校段階での英語力および動機づけに与える影響 (I) 英語授業実践学の展開, 66-77, 東京: 三省堂
- Takagi, A. (2003a). The effects of language instruction at an early stage on junior high school, high school, and university students' motivation towards learning English. *Annual Review of English Language Education in Japan*, 14, 81-90
- 竹内 理 (2003). より良い外国語学習法を求めてー外国語学習成功者の研究 東京: 松柏社
- 山森光陽 (2004). 中学校1年生の4月における英語学習に対する意欲はどこまで持続するのか 教育心理学研究, 52, 71-82
- 八代京子・世良時子 (2010). 日本語教師のための異文化理解とコミュニケーションスキル 東京: 三修社

付 録

英語学習に関する意識調査

これは、皆さんに、英語学習に関する考えをお聞きするアンケートです。一般論としてではなく、**自分自身のこととして**回答して下さい。また、正しい答えや間違った答えというものはありませんので、思ったとおりに答えて下さい。

このアンケート調査は、「パートⅠ」と「パートⅡ」から構成されていて、裏面にも質問項目があります。それぞれの質問をよく読み、全ての質問について回答して下さい。回答もれのないようにお願いします。

なお、「パートⅠ」には、個人的な内容に関する質問も含まれていますが、回答は全て匿名として扱いますので、率直にお答え下さい。宜しくお願いいたします。

「パートⅠ」

1. あなたの性別に○をつけて下さい。 (男 ・ 女)
2. あなたの年齢はいくつですか。 () 歳
3. あなたの所属学年に○をつけて下さい。 (1年 ・ 2年 ・ 3年 ・ 4年 ・ 5年 ・ 6年以上)
4. あなたが英語の学習を始めたのは何歳の時ですか。 () 歳
[※学校以外の英会話教室なども含みます]
5. 現在、大学の授業以外で英語を学んでいますか。 (はい ・ いいえ)
[※塾や英会話教室など]
6. 現在、1日に平均どのくらい英語の学習をしていますか。[※大学の授業以外の学習時間の総計] (30分未満 ・ 30分 ・ 1時間 ・ 2時間 ・ 3時間以上)
7. 英語4技能のうち、最も重要だと思うのはどれですか。 (リスニング ・ スピーキング ・ リーディング ・ ライティング)
8. 英語4技能のうち、どれに一番力を入れて学習していますか。 (リスニング ・ スピーキング ・ リーディング ・ ライティング)
9. 現在のあなたの英語力はどのレベルですか。下から1つ選び、右の数字に○をつけて下さい。 (1 ・ 2 ・ 3 ・ 4 ・ 5)

1. 「中上級レベル」(＝英検準1級以上／TOEIC 730点以上)

日常生活の一般的な事柄や専門的な事柄について会話ができ、講義や放送の大意を理解できる。新聞などの高度な英文を読み、自分の考えを書くことができる。

2. 「中級レベル」(＝英検2級程度／TOEIC 530～720点程度)

日常生活の一般的な事柄に関する会話が出来る。日常生活の一般的な事柄に関する文章が読み、簡単な文章を書くことができる。

3. 「初級レベル」(＝英検準2級程度／TOEIC 450～520点程度)

日常生活の身近な事柄についての会話が出来る。日常生活の身近な事柄についての文章が読み、簡単な手紙を書くことができる。

4. 「初級レベル」(＝英検3級程度／TOEIC 270～440点程度)

挨拶や人の紹介などの簡単な会話が出来る。簡単な文章が読み、基礎的な英語を用いて簡単な文章を書くことができる。

5. 「基礎レベル」(＝英検4級以下／TOEIC 260点以下)

決まり文句を用いて簡単な挨拶ができる。簡単な文章が読み、短い文章の大意が理解でき、基礎的な英語を用いて簡単な一文を書くことができる。

10. あなたは外国へ行ったことはありますか。 (ある ・ ない)
11. 質問10で、「ある」と答えた方は、右の(1)～(4)の項目に記入して下さい。 (1) 渡航先の国名(訪れた外国の名前)

【記入例】(複数ある場合は／で区切って記入)

- (1) 渡航先の国名 …… アメリカ/フィリピン
- (2) 渡航時期 …… 14歳/19歳
- (3) 渡航期間 …… 1か月/6か月
- (4) 渡航目的 …… ホームステイ/留学

(2) 渡航時期(訪れた時の年齢)

(3) 渡航期間(訪れた外国へ滞在した期間)

(4) 渡航目的(何をするために外国へ行ったか)

「パートⅡ」

次の質問項目は、あなたにどの程度当てはまりますか。「全く当てはまらない(1点)」から「非常に当てはまる(6点)」までのうち、最も当てはまると思う数字に○をつけて下さい。質問項目は全部で40項目あります。

【記入例】

もしあなたが、次の質問項目の内容と全く同じ考えを持っている場合、次のように記入します。

「朝食をしっかり取ることは重要だ。」 1 ・ 2 ・ 3 ・ 4 ・ 5 ・ ⑥

	全く 当ては まらな い	当 ては まら ない	あ ま り 当 て は ま ら ない	や や 当 て は ま る	当 て は ま る	非 常 に 当 て は ま る
1. 英語はとても好きだ。	1	2	3	4	5	6
2. 英語が話せたら格好いいと思う。	1	2	3	4	5	6
3. 将来就きたい職業は、英語力が要求される。	1	2	3	4	5	6
4. 将来、留学したいと考えている。	1	2	3	4	5	6
5. 英検やTOEICなどの資格試験に向けて、英語の勉強に取り組んでいる。	1	2	3	4	5	6
6. 洋楽を聴いたり、洋画を観たりするのが好きだ。	1	2	3	4	5	6
7. 英語を勉強して、もっと自分の視野を広げたい。	1	2	3	4	5	6
8. 外国の人と友達になりたいので、英語を学んでいる。	1	2	3	4	5	6
9. 英語はとても得意だ。	1	2	3	4	5	6
10. 英語を学ぶことで、日本語の理解が深まった。	1	2	3	4	5	6
11. 何のために英語を勉強するのか分からない。	1	2	3	4	5	6
12. 英語のテストで悪い点数を取りたくないで、英語の勉強をしている。	1	2	3	4	5	6
13. 英語を通して、西洋の物の見方や考え方を理解することができた。	1	2	3	4	5	6
14. 英語を学ぶことで、前向きに物事を考えるようになった。	1	2	3	4	5	6
15. 英語を勉強するのは楽しい。	1	2	3	4	5	6
16. 英語を勉強する必要性を強く感じている。	1	2	3	4	5	6
17. 英語を通して、西洋の文化に対する興味・関心が高まった。	1	2	3	4	5	6
18. 将来、海外旅行に行きたいと考えている。	1	2	3	4	5	6
19. 英語の授業は楽しい。	1	2	3	4	5	6
20. 英語は、英語圏の人に限らず、世界中の人とコミュニケーションをとる手段だ。	1	2	3	4	5	6
21. 英語は難しい。	1	2	3	4	5	6
22. 英語力を高めるためには、英文法の学習が不可欠だと思う。	1	2	3	4	5	6
23. 英語を学ぶことで、積極的に人とコミュニケーションをとるようになった。	1	2	3	4	5	6
24. 英語を勉強するのはあまり好きではない。	1	2	3	4	5	6
25. 英語を学び続けることで、西洋の文化や価値観に対する理解が深まると思う。	1	2	3	4	5	6
26. 英語ができると、将来役に立つと思う。	1	2	3	4	5	6
27. 英語を学ぶことで、日本の文化に対する興味・関心が高まった。	1	2	3	4	5	6
28. 英語で、ネイティブの先生と積極的にコミュニケーションをとるように心掛けている。	1	2	3	4	5	6
29. 英語の授業はあまり理解できない。	1	2	3	4	5	6
30. 英語ができなくても、将来、特に困ることはない。	1	2	3	4	5	6
31. 英語を通して、日本の文化や価値観を、外国の人に伝えたい。	1	2	3	4	5	6
32. 英語を使って、外国の人とコミュニケーションをとりたい。	1	2	3	4	5	6
33. 英語の勉強を続ければ、必ず英語はできるようになると思う。	1	2	3	4	5	6
34. 英単語の学習に熱心に取り組んでいる。	1	2	3	4	5	6
35. あの人のように英語を話せるようになりたい、という目標となる人がある。	1	2	3	4	5	6
36. 計画を立てて、英語の学習に取り組んでいる。	1	2	3	4	5	6
37. どのように英語を勉強したらよいか、よく分からない。	1	2	3	4	5	6
38. 英文法の学習に力を入れて取り組んでいる。	1	2	3	4	5	6
39. 英語を一生懸命勉強している。	1	2	3	4	5	6
40. 英語力を高めるためには、語彙力の増強が必要だと思う。	1	2	3	4	5	6

ご協力ありがとうございました！

A Study of English Major University Students in English Learning Outcome, Behavior and Attitudes: Comparative Analysis Based on Gender Differences, Starting Time of Learning English, English Proficiency and Experiences of Studying Abroad

Naoto Oshiro

Abstract

The present study investigated whether there were any significant differences in English learning outcome, behavior and attitudes based on gender differences, the starting time of learning English, English proficiency and student experiences in studying abroad. The questionnaire was administered to 175 English major university students in Japan regarding the following six categories: the outcomes of learning English, the target setting and English learning behavior, the positive attitudes toward learning English, the international posture, the negative attitudes toward learning English, and English learning motivation. The data were subjected a to t-test, a chi-square test, and correlation analysis. The results showed that an increase in students' interests in and understanding the target-language culture varied according to gender differences and English proficiency, and that the starting time of learning English and English proficiency determined the attitudes toward learning English. Data also indicated that a manner of thinking and uses of learning strategies varied according to English proficiency, and that the experiences of studying abroad caused an alteration in learning motivation.

Keywords: English learning outcome, learning behavior, learning attitudes, gender differences, starting time of learning English, English proficiency, student experiences in studying abroad